

「日本の技術で日本人を有人飛行させるまでの道筋」

大同大学長・JAXA 研究総括 澤岡 昭

●講演者

澤岡 昭（さわおか あきら）、北海道生れ、

大同大学学長・JAXA 研究総括

略歴 1963 年北海道大学物理学科卒業、博士課程中退

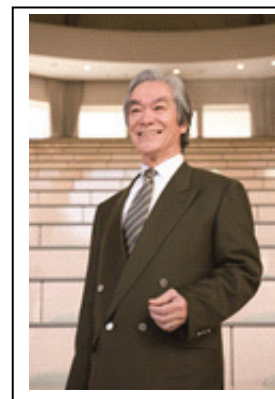
大阪大学基礎工学部助手

東京工業大学工業材料研究所（現：応用セラミックス研究所）

助手、助教授、教授、所長を経て 99 年退官

大同工業大学（現：大同大学）学長

この間、宇宙航空研究開発機構技術参与、顧問を経て現在、
研究総括として国際宇宙ステーションの応用利用計画を推進、
理学博士。



澤岡昭氏

●講演概要

日本の宇宙開発は 60 年前、糸川英夫提唱「20 分で太平洋を横断するロケット旅客機」の構想研究会発足からスタートしました。1970 年、固体燃料を使った日本独自の固体燃料ロケットによって、人工衛星の打ち上げが成功しました。「はやぶさ」は糸川先生の孫弟子達によって固体燃料ロケット M5 で打ち上げられました。その後、M5 の製造が中止、固体ロケットは長い空白期間がありましたが、大幅な改良が行われ中型人工衛星打上げ用イプシロン・ロケットして第 1 号機が本年夏に鹿児島内之浦から打上げられる予定です。

日本の技術で日本人を有人飛行させることが私の夢です。原理的に固体ロケットで人間を打上げることではできません。液体燃料ロケットが必要です。初期の液体燃料ロケット技術は米国から導入されたものですが、液体水素を使った技術は当時の宇宙開発事業団が独自に獲得したものです。現在、我が国の主力ロケットとして、H2A が運用されており、この増強型の H2B で国際宇宙ステーション物資輸送船 (HTV) が打上げられています。これらについては渥美正博氏が詳しく述べることでしょう。H2B の更なる増強を行い、HTV を発展させることによって有人飛行は可能であると確信しています。

しかし、実現には技術的な問題と同時に乗り越えなければならない多くの課題があります。莫大な開発費を投入して日本人を日本の技術で宇宙へ送る必然性が本当にあるのだろうか。国の予算を握っている官僚たちは常に日本独自の有人飛行計画に反対してきました。宇宙戦略本部が本年 1 月に決定した宇宙基本計画では、前の基本計画にあった月探査という言葉さえ削除されています。巨額な負債を抱える日本は挑戦する力を失い、全てに委縮しようとしています。これで良いのでしょうか。